

メキシコの英語教育

香川大学

竹 中 龍 範

I 概 観

1 言語的背景

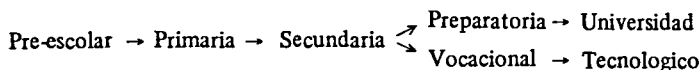
メキシコは、北はアメリカ合衆国、南はグアテマラ共和国に接する中央アメリカの国で、人口はおよそ3,500万人である。そのうち、約90%はスペイン語を母語とし、残り10%、すなわち350万人の人々はインディアン語を母語としている。現在、メキシコ国内には約50のインディアン語が話されており、その中でも Nahuatl, Yucatec, Otomí, Zapotec, Mixtec, Totonac の6つの言語はそれぞれ10万以上の話者を有し、その合計はインディアン語話者の総数の約半分を占めている。そして、インディアン語話者のおよそ半数は、時にインディアン語を2つ併用する者もあるが、多くの場合、母語とスペイン語との2言語併用者である。また、多くのインディアン語が初学年の教授言語として用いられ、それによる入門用教科書も発行されている。

一方、外国語は中等学校で導入され、英語が最も多く教えられ、フランス語がこれに次いでいる。私立学校ではフランス語、英語を教授言語としているところもある。また、宗教関係でローマン・カトリック教会におけるラテン語の使用が挙げられる(⑤: 315)。

2 教育的背景

メキシコの教育制度は、1917年に初等教育が全児童の権利として与えられたが、教育条件の整備は第2次世界大戦後に持ち越され、López Mateos 大統領の時代(1958-1964)にメキシコ文部省 (Secretaría de Educación Pública) の一連の施策、すなわち、大量の学校建設、共通カリキュラムによる初等学校の全児童への教科書無償配布、安価朝食プログラムにより初等教育制度が整えられた。次いで、Díaz Ordaz 大統領の時代(1964-1970)には中等教育(第7学年~第12学年)の拡充が計られ、就学率も22%から27%に伸びている。1973年には連邦教育法 (Ley Federal de Educación) が制定され、教育は知的、社会的、娯楽的 (recreational) 発達に等しく重きをおき、総合的 (integral) でなければならないと定められた。そして、この教育法の下に、初等・中等学校の教科書は文部省著作のもの、検定のものともに内容の書き換えが進められ、教師の再研修も全国的に行われている(②: 3-5)。

つきに、学校制度の方は



GRADES	1-6	7-9	10-12	13-16 / 17
--------	-----	-----	-------	------------

となっており、カリキュラムは螺旋的に編成されている。すなわち、学習内容は、学年が進むにしたがって、繰返し指導し、それを拡充、深化するという方法をとる。初等教育では社会科学、自然科学、数学、スペイン語という主要分野に体育、芸術が加わり、中等教育でも主要4分野は継続し、その外、特別教科領域に重点がおかれるようになる。外国語もそのひとつで、大学に進むための予備学校 (escuela preparatoria) ではさらに第2外国語が導入される。一方、高等教育レベルでは、専門分野を深く考察することに重きがおかれている(②: 8-9)。

II 教育内容・方法

1 英語の位置

メキシコはアメリカ合衆国に隣接しているにも拘らず、英語学習は、歴史的に見ると、他の国と比べ、さほど目立つものも見られない。英語学習が必要と感じられ出したのは今世紀第1四半世紀のころで、石油、金、銀、農産物などの豊富な天然資源により、イギリス、アメリカとの間に商業、外交上の関係が確立された時である。第一次世界大戦後はアメリカの工業発展により、両国間の貿易も増大し、社会・経済的、文化的関係の上に英語が益々必要なものとなってきた。そして、英語は、教育課程の上でも、それまで首位を占めてきたフランス語にとって代わったが、その理由についての公的な説明はなされていない。今日では、英語は重要で必要であるというばかりでなく、ある社会・経済的グループの人々には不可欠なものとなっているが、学校教育の場においては、生徒にさまざまな学習経験の機会を与えるという意味から、英語を一教科として学習させることの妥当性が認められている。ただ、現実的には、中等学校における外国語教育の成果は満足できるというには程遠く、英語のコミュニケーション・スキルに欠ける者が殆どという状態である(⑩:39-40)。

学校教育の方では、中等学校で外国語が導入されることは既に述べたが、その状況を具体的に見てみよう。前期中等教育では、外国語は英語かフランス語を学習し、後期中等教育では、例えば国立予備学校(E.N.P.)の場合、最初の1年はそれを続けて学習し、2・3年ではそれを継続することもできるし、あるいは英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語の4か国語の中からひとつを選んで新しく学ぶこともできるようになっている。ただ、現状としては、英語をとる者が大多数を占め、その数は88%にのぼっている(⑩:53-54)。

2 教育課程

メキシコの中等教育は中央集権化されており、カリキュラムは文部省が決定する。各学校では特別教科(additional subjects)を課することもできるが、少なくとも文部省認定のカリキュラムに従った教科を指導しておくことが求められる(⑥:18)。中等学校カリキュラムに規定されている教科は、スペイン語およびスペイン語文学、数学、自然科学、社会科学、外国語(英語もしくはフランス語)、体育、音楽、工作であるが、成人向け中等学校ではあとの3つは課されない。

前期中等教育では英語かフランス語のいずれかが3年間教えられるが、殆どの場合英語がとられ、例えば、1976年の時点で、メキシコ・シティーにある201の連邦立中等学校のうち、フランス語を教えているのは22校で、残りは英語を教えている(⑧:20)。これは地方に行くほど、英語をとる率が高くなる。また、1か国語しか教えないのは、スペース、設備、教員補充の問題を回避するためであるとも言われている。

つぎに、外国語教育の目的・目標を見てみると、まず、メキシコ文部省がUNESCOに回答したところでは「外国語教育の目的は、その言語を理解したり、音声や文字を用いて発表したりするのに必要最低限度の知識を与えるだけにとどまらず、生徒が高等教育に進学して、英語やフランス語の高度の研究ができるような基礎を養うことである。」となっている(⑩:33;⑨:77より引用)。これは、基本的には、1973年の連邦教育法制定後も受け継がれたようで、前述の国立予備学校の現代外国語科が設定した

- a) to expand the students' cultural horizon;
- b) to help the student in his professional studies by preparing him to use reference books written in a foreign language; and

c) to enable the student to acquire some oral and written communication ability.

という目標(⑩:54)からもそれがうかがえる。

授業は、各学年を1コースとして編成され、50分授業が週3時間行われる。ただし、この時間数は、特別活動が多いために、現実にはかなり少なくなるということである(⑧:20)。

3 教科書・教材など

メキシコでは能力の低い教師、あるいは自分の能力に自信をもてない教師が多いために、教科書の存在が過大視される傾向にある。そのために、教科書を逐語訳することが多く、生徒を退屈にしているという。

中等学校の教科書は全教科とも検定委員会の検定を受けねばならず、公立、私立とも検定教科書を用いている。かつ、この教科書はメキシコ国内で印刷されたものに限られ、毎学年度の初めに文部省から示されたリストによって選定することとなっている。現在、英語の教科書は、前期中等学校第1学年用は15種類、第2、3学年用には10種類が検定を受けている。しかし、それらの教科書も実際に教師が必要としている助けとなるものは殆どない、という状態である(⑧:22)。

4 教授法

前期中等学校レベルにおける教授法は、1973年までは文法・訳読式に基づき、1学年あたり年間100時間が充てられていた。しかし、現実には平均して年間60時間ぐらしか授業は行われず、教材が消化しきれない状態であった。そこで、1973年に、構造、口頭技能中心のシラバスが生まれ、それまでの授業時間より少ない時間で指導する方法が実験的にとられた。そして、1975年の教育改革では全教科のシラバスが改訂され、現在はそれに拠っている。英語のシラバスも、内容、教材消化に要する時間という点で現実的なものとなり、言語を場面、文脈の中で教えるという指導法がとられている。因に、audio-lingual method の影響は決して大きくないということである。そして、指導は螺旋的に行われ、究極目標をコミュニケーション技能におき、中間目標が4技能に分けて具体的に示されている。シラバス全体は、他教科と同様、行動目標によって組織され、それをさらに小さなユニットに分けて構成されている。このようなシラバスの改訂により、生徒の授業への積極的参加が促進され、動機づけの面でも成果が現われているという(⑧:21-22)。

一方、後期中等学校の場合を国立予備学校(E.N.P.)を例に見てみると、やはり、文法・訳読式教授法から始まる。すなわち、1867年の開校時から今世紀初頭まで文法・訳読式が続き、その間、改革らしきものといえば、文法・翻訳中心だったところに、1885年、読解、作文が加えられた程度で、本質的な改革とは言えない。それが、メキシコ革命から第2次世界大戦のころにかけては、L. Bloomfield の影響をうけ、習慣形成理論が教授法の基礎を与えることとなる。やがて、それは1950年代から1960年代にかけて audio-visual method に取って代わられることになるが、これもまた、その機械的な面が批判を受けて、近年では折衷式教授法に落ち着いている。そして、口頭技能、生徒の積極的な活動が重視され、視聴覚機器の活用とともに、ロール・プレイングや寸劇の利用も試みられている(⑩:54-56)。

ただ、最近では、高等教育レベルに進むにつれて、4技能を伸ばすことよりも、読解技能、およびそのストラテジーの指導に力点が移される傾向にあるという。これは、英語で書かれた教科書、参考書を読み、多くの参考図書が英語で書かれている専門分野で研究を行う学生、研究者、教育者の要求に応えようというもので、後期中等学校レベルでも、特に工学、科学分野においてカリキュラム作成者の関心事となりつつある(⑥:51)。

5 教員養成

現在、メキシコでは教員需要の方が多いため、英語教師としての正式な訓練を受けた者は全体の40%に満たない。例えば、メキシコ・シティーの連邦立前期中等学校で教えている約1,500人の英語教師のうち、高等師範学校の卒業生は39%、メキシコ国内の大学卒業者は2%、外国の大学卒業者は1%未満である(⑧:21)。この教員資質の問題については、有資格教師の担当時間を多くするという方策がとられている。

教員養成は、現在、高等師範学校および大学で行われている。まず、高等師範学校 (*escuelas normales superiores*) は師範学校(第10学年~第13学年)の上に立つもので、中等学校教員、師範学校教員の養成を目的としている。現在、メキシコ国内には30余りの高等師範学校があるが、それらは全て連邦政府直轄の *Escuela Normal Superior* (略称 *ENS*) に準じている。ENS は1942年に設立され、*Maestro en Ingles* を英語教師に与えるコースが開設されている。(註—大学はこの *maestro* を “*master*” ではなく、“*teacher*” ぐらいの意味に解している。) ENS のカリキュラムは全教科にわたって、1945年、1959年に改訂され、英語の場合は1976年に一部変更が加えられて現在に至っている。そこで、学生は70%を英語の習得に充て、残り30%はスペイン語によって教育学を学ぶのにあてている。具体的な内容は

four courses of English as a foreign language, starting from a low-intermediate level;
an introductory course of English phonology, two of conversational practice, and one of English phonetics;
three courses of English literature, and one of English and American cultural history;
two courses of methodology in relation to the teaching of English as a foreign language, both of which require systematic teaching practice.

となっている。また、ENS で学位をとるには4年間にわたる通常コースと、夏休みに6週間ずつを6夏かけてとる集中コースとがあるが、前者はメキシコ・シティー在住者を、後者は地方在住者または現職教員を対象としている(④:214-218)。

一方、大学での教員養成は歴史が浅く、その数も少ない。また、師範学校系の教員養成の方が人気があるという。大学での教員養成は免許状 (*certificate*) コース、学士コース、修士コースと分かれ、次のような授業が開講されている(③:227-232)。

A. *Academic Specialization*

1. Linguistics
 - a. General / Theoretical Linguistics
 - b. Psycholinguistics
 - c. Sociolinguistics
 - d. Applied Linguistics
 - e. Contrastive (Spanish / English) Linguistics
2. Culture and Society (Literature, History, etc.)

B. *Pedagogy*

1. Professional Education (Learning Theory, Curriculum Development, etc.)
2. Second Language Pedagogy (Methods, Approaches, Objectives, etc.)
3. Second Language Assessment (Evaluation and Testing)
4. Language Teaching Practice
5. Language Development (English or other language)

また、現職教員の再教育は前記 ENS と、文部省の下部機関である *Mejoramiento Profesional* で行われている。

III 考察

アメリカ合衆国に隣接しながら、メキシコの英語教育はあまり効果があがらないという。その中で、教授法の改善が試みられ、学習者の授業への積極的参加によりその動機づけが高められ、*drop-outs* の割合も減少しつつあるということから今後の成果が期待されよう。週3時間で何ができるかと模索の状態にあるわが国の英語教育に、同じく週3時間の授業を行っているメキシコの英語教育から何らかの示唆を求めることもできよう。ただ、その成果が国際的に検証されねばならないが。また、MEXTESOL による英語教育学的研究も期待される。

〔引用、参考文献〕

- 1 Conrad, A. W. and J. A. Fishman (1977) "English as a World Language: The Evidence," in Fishman, J. A., R. L. Cooper, and A. W. Conrad, *The Spread of English: The Sociology of English as an Additional Language*, pp. 3-76. (Newbury House).
- 2 Dobson, J. R. A. (1978) "Overview of Contemporary Mexican Education," in Holcomb (ed.) (1978), pp. 3-13.
- 3 Elmer, E. A. (1978) "University EFL Teacher Preparation Programs in Mexico," in Holcomb (ed.) (1978), pp. 227-232.
- 4 Emerson, R. O. (1978) "Training English Language Teachers for Mexican Federal Education," in Holcomb (ed.) (1978), pp. 214-221.
- 5 Ferguson, C. A. (1966) "National Sociolinguistic Profile Formulas," in Bright, W. (ed.), *Sociolinguistics*, pp. 309-324. (Mouton).
- 6 Holcomb, C. (ed.) (1978) *English Teaching in México*. (Instituto Mexicano-Norteamericano de Relaciones Culturales, A. C.)
- 7 Mackay, R. (1980) "English for Specific Purposes: A Mexican Case Study," *ETF* 18, 2, pp. 8-12.
- 8 Maqueo, B. G. (1978) "The Teaching of English in Federal Secondary School System," in Holcomb (ed.) (1978), pp. 19-28.
- 9 沖原勝昭 (1979) 「目的・目標に関する国際比較」垣田直己編『英語教育学研究ハンドブック』 pp. 65-81. (大修館書店)
- 10 Orozco, C. R. (1978) "Teaching Modern Foreign Languages at the National Preparatory School," in Holcomb (ed.) (1978), pp. 53-57.
- 11 Ramos, F. H. (1978) "The Foreign Language Requirement in Mexican Secondary Schools: Some Problems and Possible Solutions," in Holcomb (ed.) (1978), pp. 38-46.
- 12 UNESCO (1965) *Modern Languages at General Secondary Schools, Supplement*. (International Bureau of Education and Unesco).